論説・提言

第20回　このコーナーでは「日本が目指すべき姿と社会のあり方、そこで必要とされるインフラと実現に向けた方策、そしてその際に果たすべき建設コンサルタントの役割とは」をテーマに、各専門分野の視点からの提言を掲載しています。

春。新人たちに伝えたいこと

角田 光男（TSUNODA Mitsuo）
一般社団法人建設コンサルタンツ協会　理事

1948年東京都足立区出身。1972年東京工業大学工学部卒業（社会工学専攻）。同年共同通信社に入社し、編集局科学部、仙台支社、盛岡支局を経て、1978年に本社社会部に異動。警視庁や国会などを担当。その後、本社社会部デスクを経て仙台編集部長。2003年長野支局長。2008年定年退社。同年東京MXテレビ・ニュースキャスター、コメンテーター（2011年まで）。2009年東京都市大学非常勤講師（下町防災・文化論）、2020年3月まで同大学学長特命広報ディレクター。著書に『東日本大震災 命の道を切り開く 3・11最前線の初動 13人の証言』（建設コンサンルタンツ協会刊）。ほかに共同通信、MXテレビ時代の随想記録『メディアつれづれ帖』『9chテレビつれづれ帖』などがある。一般社団法人建設コンサルタンツ協会理事。一般社団法人共同通信社社友。

「とき、ところ、対応」　電話が勝負だった

春、4月。企業が新入社員を迎えるころになると、思い出すことがある。もう半世紀も昔のこと。私は理工系の大学を出て、共同通信社に入り記者になった。「荒川放水路」が流れる東京の下町に生まれ、「大水」でも「祭り」でも大人たちにもまれて、育ってきた。浪人生活を1年経験し、大学も1年留年して“寄り道”をしてきたから、若かったけれど、それなりの経験があると、自負していた。

1970年代の「大学紛争世代」で、4月の入社前に1か月近くの研修があり、30人ほど採用された同期生は、入社式を終えると、全国の支社局に散っていった。私はただ一人の理系出身者ということで、本社の科学部に配属された。地方回りを終えて、本社に上がってきた中堅、ベテランばかりの職場だった。

10人ほどの小さな部だから、電話が「リン」となったら、真っ先に受話器を取り、とにかく先輩の顔と名前を覚え、間違いなく取り次ぐことを心掛けた。昼の休憩で、ある先輩と二人だけの時間帯に、山形の新聞社から問い合わせがあった。先輩は、夕刊締め切りの急ぎの原稿にかかり、手が離せなかった。

「いやぁー、そのー、4月に入ったばかりの新人記者なもんですから、わからなくて…。すみません」。ガチャンと切られた。天文学関係の「日食」の時間帯か何かの問い合わせだった。聞き耳を立てながら、記事を書き終えた先輩が、すぐに調べて、新聞社に電話をかけ、新人記者の対応のお詫びまでした。

そのあと、昼メシに誘ってくれた。「ツノダ君、あの対応はないよ。共同通信は、全国の新聞社や民放局へのニュースの卸問屋みたいなものだ。それを信頼して先方は尋ねてくる」。「わからない分野は、僕だってたくさんある。そういう時は、すぐに調べますから、とまず返事をする。そして、先方の電話番号を復唱して、間違いのないようにメモしておく。これが電話取りの基本なんだ」と、教えてくれた。

「時間がかかりそうなときは、調べの途中経過を入れることも大切。ひとりで抱えずに、知恵ある先輩に尋ねなさい」とも。当時は、どの組織も企業も、人の声や息遣いまでもが、聞こえるような仕事場だった。先輩は「鉄は熱いうちに打て」と思ったのだろう。この昼メシは「新人研修」よりも効いた。

「完成100年」大河の風格、荒川放水路

河川敷のグラウンド

調査船「あらかわ号」

小松川の「荒川ロックゲート」

自分が所属する組織の社会的な役割や使命が、少しわかった気がした。社会人にとって、時々刻々の「とき、ところ、対応」が、学生時代とは違って、真剣勝負なんだということを。一つの新聞社の背後には、何十万人もの読者がいることを。73歳になる老記者は、桜の季節とともに思い出し、心を新たにする。

新人への期待？　「組織に風を入れる」

記事が書けず“言語障害”に陥った。取材を終え、原稿用紙の「一行目の書き出し」に苦吟する。私の姿をみながら「原稿はそんなに、凝らなくていいんだよ。一年生は一年生らしい記事を書けば、デスク（記事の取りまとめ役）が、直してくれるんだから」。「凝っていません」と、私はちょっとムキになった。

当時でいうと、人工衛星打ち上げなどの宇宙開発、がん治療、原子力発電、公害問題もあった。多岐にわたる科学ニュースの事実関係が、新人記者には知識が不足していて、理解できなかったことも多かった。

書けなくなって、社会部記者としても鳴らした科学部長に相談した。「そりゃそうだよ。難解な事実を理解し、記事として表現し、行数内に収める。そんな芸当が新人時代からできたら、キミ、化け物だよ」。「いきなり記事が書けるなんて、期待していない。書くことはテーマによっては“10年選手”だって、なかなか難しい」。「20歳そこそこのキミが、この部に来たことで、キミには見えないかも知れないが、新しい風が吹き込んでくる。その価値が新人にはあるんだ」と、励ましを受けた。

荒川放水路近くの、東武鉄道の「土手下」にあった家内工業の自宅で、子供たち向けの「クレヨン、クレパス」を、一心につくっていた老職人のおやじは「半人前のお前にできることは、あいさつと掃除だ。だから心を込めてやれ」。これが口癖だった。1年間、私は科学部の仕事に耐え、翌年の春、念願がかなって東北の仙台に転勤した。今度は「警察回り」の駆け出し記者になった。

「行けばわかるよ」　現場を歩こう

満60歳の誕生日をもって、社会部記者が長かった共同通信社を離れた。退職直後から4年半、東京のローカルテレビ局「東京MXテレビ」のニュースコメンテーターを務めた。その時に、こんな出会いがあった。国土交通省荒川下流河川事務所（東京都北区）が主催する地元の小学校での「荒川放水路の出前授業」を、ニュースに取り上げた。放水路は荒川下流河川事務所脇の岩淵水門から東京湾の河口までの22km。昭和の初頭、1930年に20年の歳月をかけて完成した大事業だ。

私は「放水路は首都の中枢や下町の治水のかなめ。それと今日的な意味では、密集地域が多い下町エリアに、広々とした公共空間を創出し、河川敷が野球場やビオトープなどに活用されている。先人たちが洪水から地域を守るために、わが家や田畑、千古の歴史のある寺院の境内などを供出し、大きな犠牲を払って建設した。そうした苦闘の歴史を忘れてはならない」と、コメントした。

ニュースを見た荒川下流河川事務所の広報担当者から「治水インフラの維持管理にあたる自分たちの思いを語ってくれた」と、感謝の電話をいただいた。それ以来、歴代の所長さんのご厚意で、非常勤講師を務めていた東京都市大学の学生たちや社会人を、調査船「あらかわ号」に乗船させてもらい、10年にわたって「荒川実習」（合計250人が参加）を行ってきた。

実習のねらいは「放水路の水面に身を置いて、万里の長城のように続く堤防を見上げ、下町の治水の現状について“現場感”を養うこと」。これに尽きる。小松川の「荒川ロックゲート」では船を降り、東京湾の本来の高い水位と、水門によって低く仕切られた「内水河川」との水位差を実感させる。

「デジタル変革の時代」と言われる。が、建設コンサルタントの業界に入られた若い皆さんには「生身の人間」に数多く接し、現場を歩き自分の目で「ファクト」を発見して「現場感」を一歩、一歩と磨いてほしい。

越後の良寛和尚の言葉　『行く道は遠し　行けばわかるよ』を贈りたい。